

南洋旅行と黃道光

坂元鐵馬

一昨年(一九二〇年)の天文月報六・七月號に出てゐました。ホフマイスターの「黃道光を訪ねて(西印度紀行)」の文が刺戟になりまして自分も一つ南の方に掛けて果して此記事の様なものが確めて見度いと思つてゐましたが、幸ひ今度春休みに年來の希望を果す事が出来ましたのでこゝに旅行の概要を記します。

普通南洋と申しますと馬來諸島方面を指しますが、私の参りましたのは此頃返せ返さぬで問題になりました委任統治の南洋群島の中日本が一番近いサイパン島附近です。

第一の目的は黃道光と對日照の觀測で黃道光は熱帯では明るく見えると云はれるがどんなに明るく見えるか、又内地との間に同時觀測をやつて中心線が一致するかどうか、即ち視差の有無を確める爲です。第二は昆虫採集及び海洋生物の採集、第三はつまり南の國に憧れてと云ふ所です。往きも歸りも一週間かゝるし只一人旅ですから退屈せぬ爲に晝間は双眼鏡で太陽を眺めたり海水の溫度、比重、氣温等を測る事にしました。

日本郵船の裏南洋航路に、横濱——サイパン——ヤップ——パラオ——ダバオ行の西廻線と横濱——サイパン——トラック——ヤルト行の東廻線、その他に横濱——サイパン——テニアン——ロタ行のサイパン線、以上三つの航路がありますが、私の乗りました船はサイパン線の筑後丸と云ふ船で二千三百噸、南洋航路では一番古くて

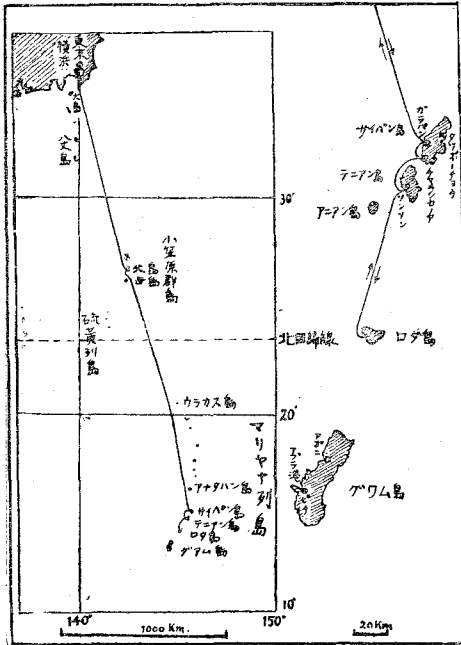
小さい船ださうです。

四月六日福岡發、七日早朝横濱着漸く船に乗り込み三等室に入つて見ますと客と見送人で一杯です盪棚式に二段になつて薄暗く疊は敷いてありますがペンキの臭氣がムツとする様です。

合圖の銅羅が鳴つて型の如く別れのテレブ華やかに送る人送らるゝ人の間を繼ぐテレブも一本切れ二本切れやがて最後の一本が切れ船は靜かに岸壁を離れ別れを惜む白いハンカチのみが何時迄もひらめいてゐます。船は七日午前十一時出帆。初めて見る横濱の港、日本の表玄關丈けに大きな船が澤山入つてゐます。正午頃横須賀の沖を通過、遙か彼方に航空母艦が角材を浮べた様に見えました。三浦岬を過ぎて城ヶ島が見えます。野島崎の白い燈臺が少さくなると船はもう太平洋へ乗り出したわけでウネリが高まつて來ます。伊豆の大島はかすみで見えず、近頃自殺大流行で名を擧げた三原山の噴烟も分りません内地の山々が、霞んですつかり見えなくなるといさゝか淋しいです。

船客の大部分は沖縄の人で所謂農業勞働者、向ふの甘蔗畑に働きに行く人達です。他は商人か、内地から向ふに活路を見出しに行く人等です。

三日目の午前小笠原群島が見えて來ました。青い海の上に小さなゴツゴツした岩山が澤山並んでゐます。犬の齒の様です。双眼鏡で見ますと青々と草の生へた島もあります。が無人島ださうです。



彼方に父島が見えて来ました。富士火山脈の延長丈けにゴツゴツした島です。島が近くなりますと山膚の露れた所は紅柄の様に紅く見えてゐます。此邊は要塞地帯で寫眞を撮るわけに行きません。

午後一時二見港に入りました。山に圍まれて水深く良港です港の奥に大村の町があります。山の頂には大きな海軍の無電塔が立つてゐます。將來太平洋に砲煙棚引く時が來たら旺人に活躍する事だらうと思ひました。山には一杯檳榔が生えてゐます。内地は櫻が満開と云ふのにこゝはもう六月頃の氣候です。午後の陽が波に反射してまぶしくキラキラ光ります。碇泊二時間で上陸は出来ませんでした。錨を揚げて港を出ますと向ふに母島が見えます。燃える様な紅い夕陽が海の彼方に沈んで行きます。そして東の方には月が昇つて來ます。

翌十日は全くの風ぎです。然し大きなウネリがありますので船はゆりゆりりと動揺します。其日から急に暑さを感じずる様になりました。正午過ぎに二十三度半、北回帰線通過、船は一路南へ南へと航海を續けます。海の色がとても美しいです。全くのコバルトブルー一三時頃海豚の大群を見ました。飛魚がポツポツ飛出します。

十一日の朝、南洋富士と云はれるウラカス島を左舷遙か彼方に眺めました他終日平凡。少し時化しました。

横濱出帆以來六日目の十二日愈々サイパン島に着く日です。早朝左舷にアナタハン島が見えました。まるで大阪ことばの様な名前の島です。十時頃には既にサイパン島が見えると云ふので甲板に出て見ますと、遙か向ふの水平線上にかなり峻しい小島がポツリ浮んでゐます。

あれがサイパン島かと思ふと胸が躍ります。地球が圓いせい初めは山の頂丈け見えて小島かと思つてゐました段々近づくにつれて長い島になりました。一時頃愈々ガラパンの沖へ投錨船から見る南の島は縁に包まれて海岸は椰子の林になつてゐます。海岸から離れて沖の方を白波が一線をなして島を圍んでゐますがあれが珊瑚礁のある所ださうです。白服の役人がランチで乗り込んで來て人員點呼あり人の顔をジロジロ見て通ります。艇に乗つて一先づ上陸、一週間振りに大地を踏みました。上陸して見ると暑い事正に内地の眞夏位、道路も家も眞白で眼がくらむ様です。ガラパン町は日本人多く南洋艦の支廳あり、病院あり、小學校あり、旅館あり、自動車ありで内地の町と餘り變りません。船中で知り合ひになりました飯島さん(此人とずつと

ロタ島まで一緒に歸りにサイパン島で別れました。）と一緒に山の方へ登つて見ました。町外れに小さな小學校あり、赤銅色の土人の子供達が日本の唱歌を合唱してゐました。校庭はなだらかな傾斜になり一面青い芝生でその周圍は熱帯植物が高く茂りあちこちに椰子の木が高く見えてゐます。内地から初めて来た者に杉らしいのは先づ椰子の木です。實を澤山つけてゐます。高く高く伸び切つた所で翼の様な葉をサツと擴げた椰子は實に印象的なものです。サラサラと葉ずれの音を聞き乍ら二人登つて行きました。パンの木、芭蕉 マンゴの木、パ、イヤの木等の繁つた中に土人の家があります。その土人の家で初めて椰子の實の中に入つてゐる水を飲んで見ました。砂糖水を一寸うすめた様な甘さと一種の臭味をもつた水で喉が渇いてゐましたのでこれはうまいと思ひました。水の不自由な所はよくしたものです。一つの實の中の水はとても一人で飲み切れない程です。此島は全島珊瑚礁で下は直ぐ石ですから井戸が掘れず掘つた所で水がありませんから日本人は家をトタン屋根にして天水をタンクに溜めて飲用に供してゐますが土人は天水をとる事を知らないで椰子の水を唯一の飲料にしてゐます。其故椰子は命の親で非常に大事にし土地は内地人に貸しますが椰子の木は土人の所有ださうです。

高い所に登つて海の方を見ますと沖には先迄乗つてゐた筑後丸が浮び紺碧の海が擴つてゐます。その一瞬間内地離れて七百哩思へば遠く來つるもの哉と旅愁を感じました。

其晩はガラパンの旅館に泊り翌朝山を越へて又二人船中で親しくなつた佐々木と云ふ人の家を訪ねました。タツボウチャウと

云ふ所だと聞いてゐましたので町でもあるのかと思つて行つて見ましたら町どころか全く山の中でした。片假名の地名らしいです。開墾地でほんとに浮世離れた山中住ひ竹の柱に萱の屋根式の簡単な住居です。山には鹿もゐるさうですから鹿の鳴く聲も聞かれる事と思ひます。珍客待遇で是非泊つて行けとの事でそこに一泊、夜中に猛烈なスコールが襲來し蚊帳の中に雨が降り込み目が覺めました。

翌朝山を下り甘蔗運搬列車に乗つてチャランカノアと云ふ所へ午過ぎ着、汽船はガラパンからこゝに來て砂糖を積込んでゐましたのでこゝで又乗船、船は其日の四時頃テニアン島へ向け出帆、直ぐ隣の島ですから六時にテニアンのソソソに投錨。此島には知人がゐますので其晩はソソソ町から一里程入つた製糖會社の第二農場の宿舎に泊ることにしました。ソソソに出迎へて呉れましたのでそれから夜の田舎道を自轉車で行きましたが石灰岩のゴロゴロした夜道の事として少からず疲れました。宿舎に着いたのが八時頃、それから身體を洗つて寛ぎましたが、幸ひ空は晴れてゐる様でしたから早速黄道光觀測に取かかりました。出て見ると晴れてはゐますが地平線附近は雲が多くて充分觀測出来ません。南天は稍々晴れてゐまして南十字星高く上り、その東にはケンタウルス座が賑やかに輝いてゐます。最初は見馴れぬ星なので見當が付きませんでしたでしたが東の方に蝸が頭を出してゐましたので分りました。南東の貿易風が強く吹いてゐましたし雲も多くなりましたので南天を八分間露出で撮影しました。北極星は緯度の示す通り十五度位の北天低くかゝり、獅子座は天頂の少し南にあり、レグルス木星は正に天頂に輝いてゐます。水晶

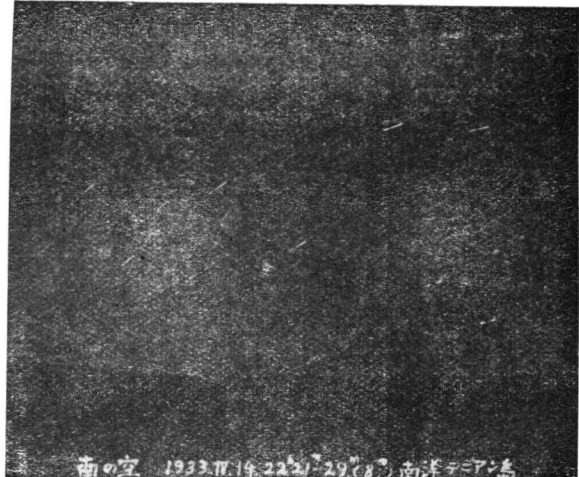
球も持つて行きましたので此時黄道光を撮影しました。

翌日は友達の案内で甘蔗畑を巡りました。現在三千町歩位開墾され肥料をやらずに立派な甘蔗が出来てゐます。竹の様に太く長い甘蔗を大分噛りましたが此處のは實に甘いです。此日の夕方五時半に乗船其夜出帆、愈々次は終點ロタ島です。翌朝早く着きましたがかなり大きい島で直径三、四里あります。サイパン、テニアン島は割合に平たい部分が多いのですが此島は大部分岡でまだ餘り開墾されてゐません。風が山のために遮ぎられる爲か餘り風がないのですから今迄の中で最も暑く感じました。上陸の時間が早く船で朝食を出さなかつたものですからバナナを朝食代りにしましたが飯島さんも私も暑さ、空腹疲勞と三つの條件が一致して午前中は二人共海岸の椰子の葉蔭で休みました。北緯十四度太陽は眞上から照します。此の島には今日本人は僅かしか住んでゐません。土人が主です。

船は着いてその日に出帆愈々今迄の路を逆に内地に向つて歸航の途に就きました。翌十七日テニアン、十八日サイパン、二十一日小笠原寄港、二十四日の午前十一時無事横濱着、二十五日夜當地着、所要日數約三週間、向ふで陸の上に泊つた晩は僅かに三夜、大部分汽車と船に揺られ通して少々疲れしました。着いた晩には流石にじつとして動揺しない寢床の有難さを楽しみ感じました。

以上が旅行の主要ですが向ふの氣候風土

ケンタウルス座と南十字星



の事を二三附記致します。熱帯の事ですから年中暑いわけで正月と云つても扇を使ひ乍らお目出度うを云ふのですから一年の區切りがはつきりしない爲年の經つのが分らぬ由、浦島太郎が何時の間にか白髪になつて驚いた筈です。一年の半分即ち十二月頃より五月頃迄が乾燥期で六月から十一月頃までが雨期になつてゐるさうです。乾燥期と云へども猛烈な夕立が日に二三回はやつて來ます。年平均温度は三十度位或はそれ以下かと思ひます。大洋の眞中にある低い島ですから割合涼しいです。

産業は甘蔗即ち砂糖製造丈けと云つていゝ位です何しろ小さな島ですから大した事は出来ません。

製糖工場がサイパンとテニアンにあります。植物は殆んど熱帯植物ですから此等に趣味のある人は收穫が多いでせう。動物では山の中に野生の豚雉等があるさうです見馴れぬ眞白なスマートな鳥が澤山飛んでゐました。大トカゲと云つて長さ三尺位の大きなトカゲがゐます。此は押へたり等しなければ食ひ付きません。それから翼を擴

げると一尺位の大カウモリがゐます。又椰子蟹と云つて椰子の木に登りあの大きな實を偉大な鎌でブツツリ鉢み切つて下に落し食べる蟹がゐます。

臺灣あたりと違つてマラリヤ蚊は全く居ないさうです。然し小さな蚊はゐます。蟻や蠅も多いです。果物はずいぶん色々な珍らしいのがあります。臺灣バナナに比べて此處のは小形でトテモ美味しいです。バナナの他にパイナップル、マンゴ、メロン、シャシャップ、パンの實パイ等々。

此島の土人は日本式の教育を受けてゐますから若い者は皆日本語が上手です。老人でも分ります。土人の中カナカ族と云ふ方は本當の土人で赤銅色に筋骨逞しく。男は赤禪をしめ、女は内地の簡單服の様なを着てゐます。カナカ族の他にチャモロ族と云ふのがゐますが此は元此島がスペイン領であつた時代にスペイン人との間に出来た混血族でカナカ族より少し文化の度が高く舊教を信じ男もシャツにゾボンを穿いてゐます。初めてサイパンに着いた夜、散歩に海岸に出た時に土人が二三人涼みに出てゐましたが色々話した後で土人が踊つて見せました。熱帯の月夜は實に明るいです。土人は身體に椰子油を塗つてゐますから月の光でピカピカ光ります。尻を叩いて調子を合して節面白く實に愉快さうに見えました。

扱肝心の黄道光観測に就き感じました事は第一に船上からの観測は船が航海中で且波靜かな時は充分観測出来ませんが時化になりますと、三等の甲板は沫をかぶりますし夜盛んに動搖するとき甲板に出る事は甚だ危険です。又碇泊中で荷役をやつた時は夜明るい電燈を橋頭につけてゐますから充分観測出来ません。又船の向きで三等甲板か

ら黄道光が見にくい時があります。二等の甲板を使はしてもらつた事もありました。然し二等デッキは室内の明が漏れたり、煙突の煙が邪魔になつたりして對日照は充分観測出来ません。案外思ふ様に行かぬものです。殊に朝は皆早く起き朝食も早いですから對日照を夜半迄待つて観測するとなると翌日は朝食抜きの心算でやらねばなりません。今度對日照は僅か三回しか観測出来ませんでした。

全く雲一つない晴夜は一回もありませんでした。北回歸線以南は南東貿易風の爲めに何時も雲が去來してゐました。然し空の透明な事は事實です。黄道光は福岡市附近で見るとよりは大部明るいですが、田舎の方で見ると左程相違ないと思ひます。此點ホフマイスターが述べてゐる通りです。サイパン附近で観測しました時は黄道光が眞直ぐに立つてゐた爲か空が澄んでゐる爲か光帯の部分を一帯廣く観測してゐます。市約二十度。小笠原から内地に近づくに従つて空がかすんで來ました。尤も其頃天氣が悪かつたせいかも知れません。船の人に黄道光の事を聞いても全然知りませんでした。

來年の二月には南洋で皆既食があるさうで京都からも観測隊が行かれる事と思ひます。二月頃は銀河が邪魔しませんから一度内地との間に同時観測が行はれる事と思ひます。

横濱からロタ島間の汽船三等運賃は往復七十圓、二割引で五十七圓で待遇は大した事はありませんが遠い割には安いです。僅か三週間位で日に焼けて一寸南洋迄洋行して來た等と洒落るのも愉快です。同時観測は岐阜の廣瀬君と北海道の下保君と三人で行ひましたがその結果に就いては追て黄道光關に發表する心算です。